インフルエンザとは

インフルエンザは、インフルエンザウイルスが感染することによっておきる感染症の一種です。通常の風邪と比べて、症状が重く全身症状も強く現れます。また、潜伏期間が短く感染力が強いことも特徴です。気管支炎や肺炎を併発しやすく、重症化すると脳炎を起こすこともあり、体力のない高齢者や乳幼児などには命にかかわることもあります。

経過

感染後、1～3日間の潜伏期間を経て、突然38～40度の高熱が出現します。同時に悪寒、頭痛、筋肉痛、関節痛、全身倦怠感などの全身症状が現れます。続いて、鼻水、のどの痛みや胸の痛みなどの症状も現れます。発熱は通常3～7日間続きます。

発症したら48時間以内に診断を！

インフルエンザの症状がでたら、早めに医師の診断を受けるようにしましょう。

発症から48時間以内であれば、インフルエンザウイルスの増殖を抑える薬が処方されるようになりました。早ければ早いほど効果的です。普通健康な成人は、軽症のうちに会社や学校を休むわけにはいかないという気持ちと重なって、高熱で苦しくなるまで病院に行かないという考えが一般的だと思います。インフルエンザは、早期診断、早期治療の効果が大きい病気です。治療が遅れるとかえって長期間、寝込むことになってしまうおそれがあります。48時間以上経った場合は、症状をやわらげる対症療法（熱をさげる、痛みをとるなど）が中心となります。

診断

2001年秋より約15分でインフルエンザウイルスが、鼻やのどの粘膜にいるかどうかを調べることができる迅速診断キットが使用されています。鼻粘膜や咽頭粘膜を綿棒で擦過し、綿棒についたウイルスの有無を調べます。陽性率は80％以上です。陽性になるにはウイルス量がある程度必要で、発症初期はインフルエンザであるにもかかわらず陰性になることもあります。

ワクチンによる予防

最も確実な予防は流行前にワクチン接種を受けることです。ワクチンは接種してから実際に効果を発揮するまで約2週間かかります。流行時期が12～3月ですから、11月中旬頃までに接種を終えていくとより効果的です。流行してからの接種は、抗体価が十分上がる前に感染する危険がありますが、抗体価が上昇していれば症状が軽くなります。

ワクチンの健康な成人に対する発症予防効果は70～90％と高い効果が認められ、また高齢者の死亡の危険を約80％減らすなど、重症化を防止する効果もあります。

左記のチェックリストを参考に、インフルエンザの疑いがある